被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

人間襤褸（らんる）の群れの中に

私は、爆心地から800m余りの木造平屋校舎内で被爆。辛うじて倒壊校舎を脱出し、学友の救助に尽くしたが、火が回ってきたので校舎を離れ、東方に向う。しかし火のトンネルに阻まれ日赤病院前の大通りに迷い出る。
御幸橋方面に続く電車通りに出ると、爆心地方面からボロ布を纏ったような悲惨な姿をした被爆者の大行列に遭遇する。日赤病院に入れず溢れた被爆者の群れは、一様に両手を前に突き出し苦痛の唸り声と、「水」「ミズ」の呻き声。その行列の中に、左目が飛び出し眼球を左掌に抱えた青年を見て寄り添って歩いた。道端には瀕死の重傷の母親が、乳飲み子を抱きしめ、夾竹桃の枝を握りしめ苦痛に耐えわが子を守ろうとしている姿を見る。
傍を通る傷ついた兵隊の群れは、銃剣を杖代わりに、市民を助ける義務も忘れ逃れていく姿を見て「日本は負けた」と思った。
これらの行列はやがて御幸橋西詰めにかかると、火傷の熱さに耐えきれず川に入る者、臨時救護所に駆け込むもの、そして軍隊から救護にきたトラックに乗って島に避難する者とに分散し、御幸橋を渡る被爆者は僅かになった。

被爆体験証言者　兒玉　光雄（こだま　みつお）氏　　**絵の作者**　津村　果奈（つむら　かな）氏（広島市立基町高校２年）